



青木明神社

奉造立鎌倉二位尼御影堂一字國土安全求願成辨攸  
 寛永十癸酉年三月十一日

大檀那間宮産次郎忠次  
 別當 乘蓮寺 秀譽

東鑑脱漏日

嘉祿元年乙酉七月十一日庚午丑刻二位家薨御六十九歳是前右  
 大將軍之後室二代將軍母儀也前漢之呂后同而令執行天下給若  
 又神功皇后令再生令擁護我國皇基給歟云々  
 十二日辛未宵寅刻<sup>辰</sup>二位家御事有披露出家男女濟之云々

按ずるに、當寺梁札の銘に、二位禪尼逝去の日を、嘉祿元年七月十三日とす。東鑑脱漏七月十一日とするを以て證とすべき歟。

瑞應山弘明寺 金澤通<sup>なごほりみち</sup>道より十四丁計右の方へ入りて、弘明寺村<sup>くみやうじむら</sup>にあり。坂東順<sup>はんとうじゆん</sup>禮<sup>らい</sup>札<sup>しやく</sup>所の第十  
 四番目<sup>よんぱんめ</sup>なり。當寺<sup>たうじ</sup>は弘法大師開創<sup>こうぼうだいしのかいさう</sup>の佛刹<sup>ぶつせつ</sup>にして、中興<sup>ちゆうきゆう</sup>を光慧阿闍梨<sup>くわゑあせり</sup>と號<sup>がう</sup>す。古義<sup>こぎ</sup>の眞言宗<sup>しんごんしゆう</sup>石



弘明寺



神明宮



川寶生寺に屬せり。毎年七月十日、十二月十八日市立ちて、大に賑はへり。

東鑑曰

治承五年 正月廿三日。於武藏國長尾寺并求明寺等者。以僧長榮可致沙汰之旨被定下。是源家累代祈願所也。云々

本堂本尊十一面觀世音菩薩 行基大士一刀三禮にして彫造なりと云 佛龕背面銘曰 中興光靈阿闍梨 注さるゝ所なり

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六尺約六丈十一面 顯果地各行基示深旨也

天満宮 本堂の内、右の脇櫃にあり。昔浪華の旅客某音神の像一軀を携へ來り、是を售らんと欲すれども、いまだ買人を得ずと云ふ、寺主喜躍して價を問ふ、旅客笑て云く、我有縁の價を求む、なんぞ世寶を事とせんやといつて、此神像を置て辭し去り、其行方をしらず、爾來當寺の鎮守と崇め奉る。むかし中院前内大臣通茂公の御門葉、梶若氏某松々軒といふ此地にありて此神を祈り、和歌の道にて大に感應を得たり。因て神恩を謝し奉らんがために、祈殿造營せしといふ。

額



本堂の向拜に掲る

大角信勝筆

熊野權現祠

本堂の左の方の山にあり。往古行基大士此地に至り給ふ時出現ありし神靈を祀る。その白狐に跨るも、のを稻荷とし、靈鳥に乗ずるものを熊野權現とする由、縁起にみえたり。猶本尊縁起の下に詳なり。

麻耳山

熊野河より上の山をいふ。土俗奥の院と號す。往古弘法大師勸行の地といふ。阿伽井あり。按ずるに本尊縁起に、弘法大師護摩壇の舊跡と稱する是ならん。

鯨鐘

堂前右の方坂の上にあり。舊鐘は弘安九年九月廿五日鑄治のものにして、願主法印長慶といふ名を注せり。今の鐘は寛政十年に改鑄せり。

七ツ石

神變奇異の靈石にして、自ら現れ自らかくる。人恒に其在所をしらずといへども、若し堂舎破壞に及び、修理の力を得ざる時、是らざるに此石現れ出づ。然るときは材敷金錢等涌くが如く幅るといへり。頻年御堂の再營を企つるは、同郷權家の庭中より出たりとなり。寺僧喜びて當時境内に安す。尙靈石の徳むなしからず、不日に工匠の資財を得て、果して明和三年造營の功を全くす由、具に懸驗集にみえたり。此石今二王門の傍に二ツあり。又最戸村といへる地にも一ツを存し、當寺表門の前耕田の中にも一ツあり

て、共に四ツは今猶現然たり。其餘の所在はしれずといふ。

二王門

石階の下にあり、金剛密迹の兩像は、運慶の作にして、各九尺餘に、木像なり。額に瑞應山と筆したるは、佐々木玄龍の書なり。

小田原北條家制札

永祿十年丁卯十月二日、石巻彦太郎奉るとあり。

同寺領寄附證文

天文二年癸巳二月十八日、石巻彦太郎奉るとあり。

本尊縁起に曰く、

人皇四十五代聖武天皇の御宇、行基大士東國遊化の頃、此地に至り給ふに、

空中に白蓮亂飛して

山上に散墜す。大士怪んで山に登り給ふに、果して神人いませり。一は

白狐に乗じ、

一は靈鳥に乗す。今境内に、靈座の熊野、各大士に告て曰く、去ぬる養老年間印度

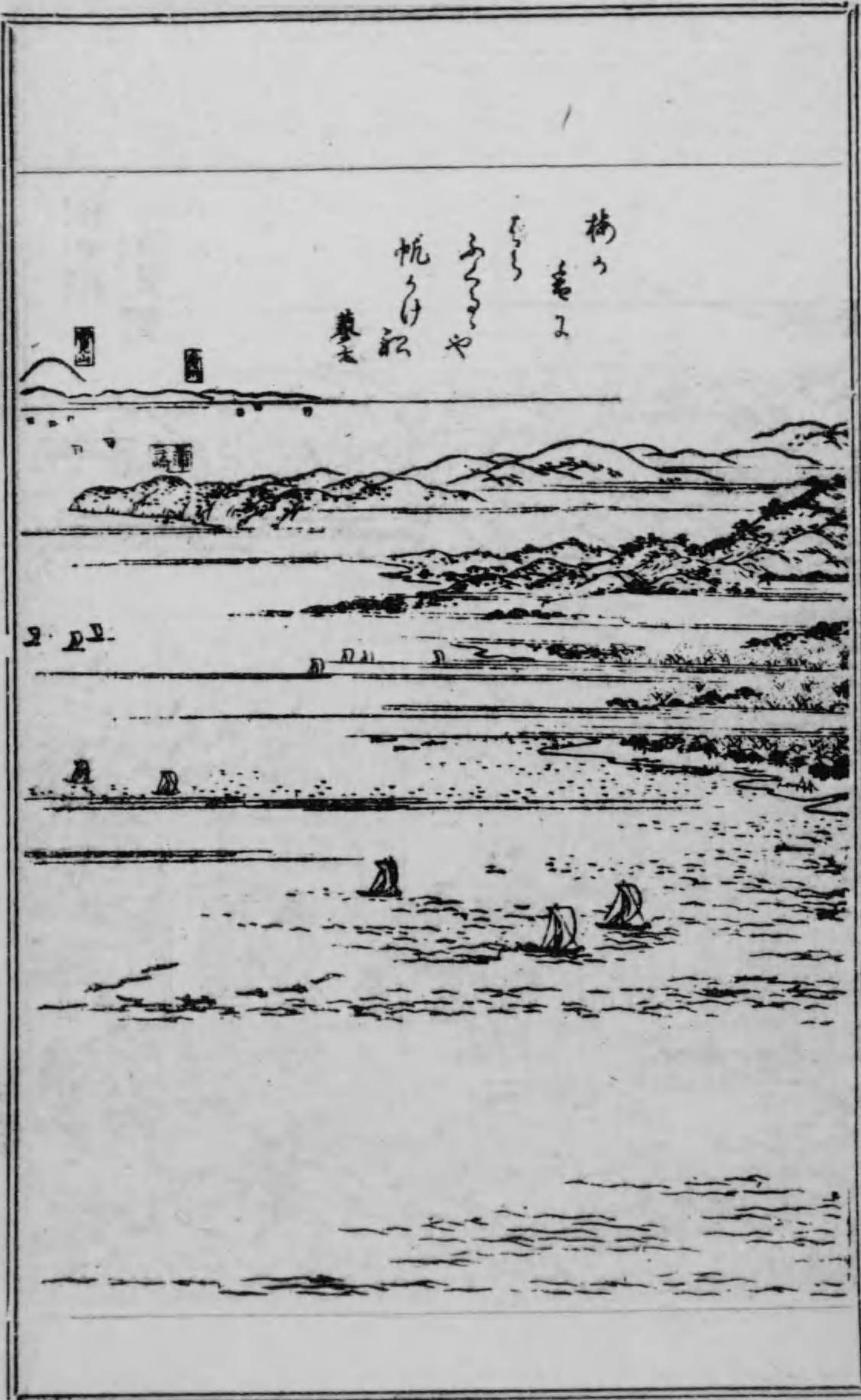
の善無畏三藏、遠く我日本の土に渡り、密教の機縁を要んとして、終に此地に來り、心を止めて七箇の幡石を加持し、所謂七ツ石、又其石に陀羅尼を書寫し、此山に鎮て結界しぬ、と云訖りて其行方をしらす。こよに於て、大士善無畏の素懷を鑑みて、十一面の尊像一軀を彫み給ふ。

當寺の本尊是也。又弘仁年間、弘法大師此地に錫を飛し、無畏三藏の舊を興し、行基大士の跡を繼ぎて、大悲者の淨刹を翺め給ふ。伽藍安鎮の爲には、四臂の不動尊を作り、密教護神の法樂には、般若心經を書寫し、人法繁榮の爲には、一千座の護摩を修し、且大黒愛染、滋字の寶塔一基、是皆大師の製し給ふ所なり。遙の後長曆の頃、武相の間疫癘流行し、人民大に是を患ふ。時に當寺中興興慧阿闍梨本尊に祈り、此疫災を除滅せらるると。云々

杉田村  
梅園



梅  
山  
帆  
石  
墓



杉田村  
海鼠製



金澤

此地は六浦莊の内なり。吉田兼好法師も、此地に住れたりしこと家集に見えたり。堯惠法師の北國紀行にも、神異絶妙の勝地なりと稱せられたり。往古巨勢金岡此地の勝景を摸し畫かんとし、及ばずして筆を投じ嘆賞す。大明心越禪師は、其佳景西湖に似たりとて、其八勝に准擬し、八詠の詩賦あり。

洲崎晴嵐

滔々驟浪斂餘暉 滾々狂波遠竹扉 市後日斜人靜悄  
行雲流水自依依

瀬戸秋月

清瀬涓々不繫舟 風傳虛籟正中秋 廣寒桂子香飄處  
共看氷輪島際浮

小泉夜雨

暮雨淒涼夢亦驚 甘泉洞々聽分明 蓬窓淹蹇無相識

腸斷君山鐵笛聲

乙艦歸帆

朝宗萬派遠連天 無恙輕帆掛日邊 欸乃高歌落雲外

依稀數艇到洲前

稱名晚鐘

夙昔名藍成覺地 華鐘晚扣若鯨音 幽明聞者咸生悟

一片迷離祇樹木

平瀨落雁

列陣冲冥堪入塞 荻蘆蕭瑟幾成隊 飛鳴宿食恁棲遲

千里傳書誰不愛

内川暮雪

廣陌長堤竟沒潛 奇花六出以鋪緜 渾然玉砌山河色

能見堂  
御筆松  
此所  
金澤の樹  
藤と平臨  
多國の  
幸り



涼  
や  
州  
芝  
御筆  
松  
西山  
宗固





遍覆危峯露些尖

野島夕照

獨羨漁翁是作家

持竿盪漿日西斜

網得魚來沽酒飲

披篔高臥任堪誇

武州金澤擲筆山能見堂。有瀟相八景之風味。因觀鑠倉志甚詳。一夕

寥々對青燈。漫賦八景之陋句。以識斯勝境云。歲執徐夏日。

東臯越杜多艸

能見堂 金澤稱名寺の良の山上にありて、禪宗家の草庵なり。本尊の地藏菩薩は惠心僧

都の作にして、一寸八分有りと云ふ。後世立像二尺五寸計の地藏菩薩を作りて、靈像をば其胎

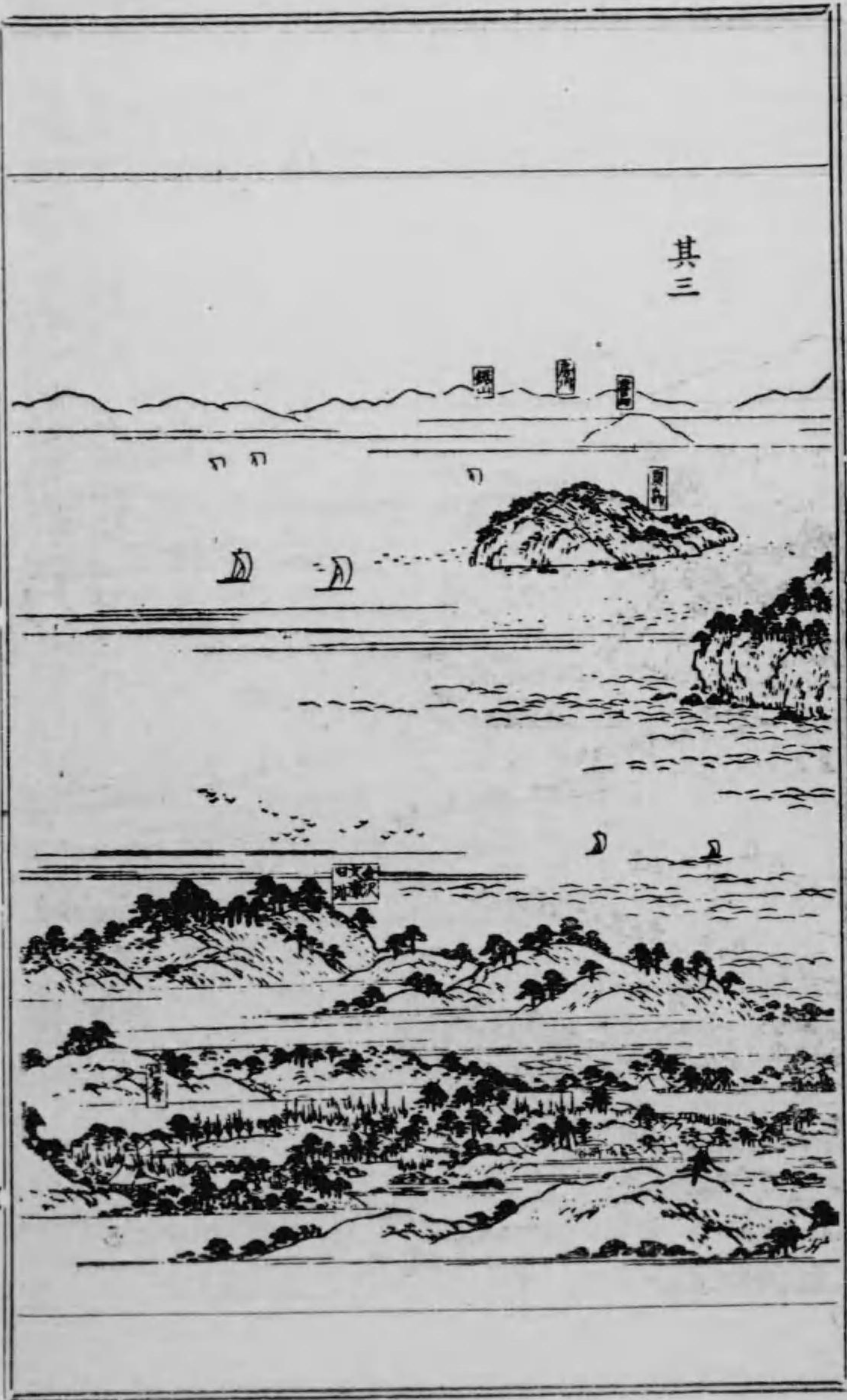
中にこめたりと云ふ。故に其草庵を地藏院と號く。今の堂宇は、近世久世和州侯廣之建立ありけるとぞ、鄭相

傳ふ、昔畫工巨勢金岡なるもの、其眞景を寫さんとし、筆の及ばざるを以て、絶倒たる故に

のうけん堂と云と。梅花無盡藏に、濃見堂に作る。或人云ふ、此地より望めば、瀬戸の八勝







其三

まで皆能見ゆる故に、能見堂と云ふといへり。

澤庵和尚のかまぐら記行に、能見堂の松と云ふに立ち上りて、金澤を見下せば、詞にも及びがたし、と記されたるは、地獄尊を本尊とする故、六道能化の意によりて、能化堂には作られたりし跡とあり。

擲筆松 堂前に存する所の大松をいふ。巨勢金岡此地の勝景、筆にも及びがたきを以て、此樹下に筆を投じたりしよりこの號ありといへり。

梅花無盡藏

出金澤七八里許。攀最高頂。則山々水々面々之佳致。昔畫師金岡絶倒擲筆之處。有名無基。但其名不甚佳。相傳曰濃見堂也。中略又云畫師擲筆之峯。云々

萬里居士

登々匍匐路攀高 景集大成忘却勞

秀水奇山雲不裏 畫師絶倒擲秋毫

涼しさや折ふし是はと筆捨松 西山宗因

ゆづりてよ筆捨松に蟬の吟 同

此地に至りて、金澤の勝景を望めば畫くが如く、南より西北に廻りては皆山にして、東は滄

涙に連り、千里の風光窮りなく、沖行く舟の眞帆片帆は、雲に入るかとあやしまる。瀬戸の神祠は水に臨み、稱名の佛閣は山に傍たり。漁家民屋は樹間々々にみえかくれし、島嶼は波間々々にあらはる、又磯戸の烟潮水の盈虚も、皆此擲筆松の下に平臨する所にして、一瞬に遮り、一日早晩の異なる、一年春夏秋冬の變れる、千態萬狀極りなく、關左の一勝地にして、しかも松島象潟の風致あるを以て、雅客遊人留連時を移すといへども、其十が一を究むる事能はず。

**金澤山稱名寺** 町屋村にあり。彌勒院と號す。眞言律にして南都の西大寺に屬す。當寺は總

山帝の勅願所にして、北條越後守平實時の本願、其子顯時の建立なり。

實時を稱名寺と號け又法名を正慈といふ

此地に居住せらる顯時より金澤を家號とす。顯時法名を憲日と號す。慶應に弘安三年三月二十八日に卒すとあり。

本尊彌勒菩薩は唐佛にして、立像五尺五寸あり。傍に運慶の作の地藏尊の木像二軀を安す。

開山は審海和尚と號す。小田原北條家分限帳に、金澤稱名寺領金澤に伏すとあり。又氏綱の

愛染堂本堂の西にあり。本尊は印子にして三寸計ありといふ。鎌倉志に、彌勒堂とありて、此堂に一切經を收藏するといふたり。當寺元亨三年大結界の圖に、三重の塔と注したり。道興准后の回國雜記に、稱名寺といへるは院はべり、ことの外な古寺にて、

伽藍などもさりぬべきさまなる所へ願證し侍りけり。三重の塔塔にまうてけるに、老僧に行きあひぬ」とあるも、此塔の事をいふなるべし。又澤庵和尚の鎌倉記行にも、「本堂一字あり、諸堂皆跡ばかりなり、五重の塔も一重になりぬ」とあるも、また此塔の事なるべし。鐘樓 其銘に云はく、

大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘

降伏魔力怨除結盡無餘露地擊捷槌菩薩聞當集諸欲聞法人度流  
生死海聞此妙響音盡當雲集此諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅  
爲樂一切衆生悉有佛性如來常住無有變易一聽鐘聲當願衆生斷  
三界苦頓證菩提

文永己巳仲冬七日。奉爲先考先妣結緣人等同成正覺鑄之

大檀那越後守平朝臣實時實時鑄之

入宋沙彌 圓種述

宋小比丘 慈洪書

改鑄鐘銘並序



称名寺





此鐘成乎文永。虧乎正應。寺而不可無鐘矣。因勵微力。竝募士女。更捨赤金。重營青鑄者也。

伏乞先考超越三有。同德於寶應。聲道遙十地。竝位於光世。音暨乎四生。九類與千。一種餘響。銘曰。

洪鐘之起 其始涉焉 載于周典 稱于竺篇

質備九乳 形象圓天 聲之觸處 聞聞入玄

三界五趣 八禪四定 醒長夜夢 驚無明眠

之朝之夕 無愚無賢 凡厥聽者 同見金仙

正安辛丑仲秋九日

大檀那入道正五位下行前越後守平朝臣顯時。法名慧日。當寺住持沙門審海。行事比丘源阿。大工大和權守物部國光。山城權守同依光。

かなざはらみとのほか 當寺大檀那なり。阿彌陀院後の山の中腹にあり。高さ七尺餘りの五輪の石塔なり。



金澤顯時墓

金澤貞顯墓

同貞顯墓 同所にあり。願時の子なり。石塔は五輪にして、高さも前に同じ程なり。

美女石姥石 ともに池中橋より西にあり。金澤四石と稱するものゝ其一たり。

青葉楓樹 本堂の前、鐘樓の傍にあり。舊樹は枯て、今弱木を栽たり。金澤八木と稱するものゝ一なり。謡曲にも是を作れり。

北國記行

金澤にいたりて、稱名寺といへる律の寺あり。むかし爲相

卿の、

いかにして此一本の時雨けむ山にさきだつ庭のもみち葉

と侍りしより後は、此木青葉にて立冬までも侍るよし、聞

ゆる楓樹朽のこりて、佛殿の軒にはべり、

さきだたばこの一本も残らじとかたみの時雨青葉にぞ降る

堯 惠

東國記行

稱名寺に至りてみれば、青葉の紅葉事問ふべき人だにな

し暫ありて、一室とやらん老僧出て、爲相卿詠歌物語して、

紅葉も老木になりて、植かへられし庭の跡など教へられ、

我坊の花けふを待ちいでたるやうなればとて、こよろあり

けにさかづき出されて、此花をばいかどなどあれば、

けふぞ思ふみぬ世の秋の色迄も此一本の花の匂ひに

など申したれば、また傍より發句ひとつせよかし、此老僧

興行のこよろざしあるべけれど、こよほどの見苦さ、はど

かりなきにしもあらねばなど、わりなきやうにて、

秋もいざ青葉に匂ふ花の露

同

鎌倉記行

池のほとりに一木のかへであり。いにしへ爲相卿いかにし

て此一本の時雨けん山に先だつ庭のもみぢば、とよみ給ひ

宗 牧



しより此木時雨にもそめぬとて、青葉の紅葉と申しならば、  
すよしかたりぬ、むかしのぬしに手向とて、

世々にふるそのことの葉の時雨より染めぬに色は深きもみぢ葉 澤 庵

西湖梅 せいこのうめ 同じく鐘樓の脇にあり。花は重河にして潔白なり。種類いまだ考へず。是も八木の其一なり。

梅花無盡藏曰

貼西湖梅詩序

丙午小春。余入相州金澤稱名律寺。西湖梅以未開爲遺恨。富士則本邦之山。而斯梅則支那之名産也。唯見蓓蕾而雖未見其花。豈非東遊第一之奇觀乎哉。金澤蓋先代好是事之主。屬南船移杭州西湖之梅花於稱名之庭背。以西湖呼之。余作詩云。前朝金澤古招提。遊十年遲雖噬臍。梅有西湖指枝拜。未開遺恨翠禽啼。及今餘恨未盡。巨福山有識面。丁未之春。摘其花數十片爲一包。見惠焉。己酉夏五。余飯濃之舊廬。奉獻彼一包於春澤梅心翁。翁借余手。措枝條。貼其花。近而見之。則



造化所設。遠而見之。則趙昌所畫。并以出於春翁之新意矣。掛高堂。一日招余令觀焉。之次。要作贅語。題軸上。漫從揚水之末章云。

西湖梅貼軸詩

萬里居士

前朝金澤古招提 遊十年遲雖噬臍

梅有西湖指枝拜 未開遺恨翠禽啼

同

一橫枝上粘西湖 名字斯花別不呼

意外春風眞假合 傍人定道盡成圖

櫻梅 同所にあり。花は重なる。普賢象 木堂の前の脇にあり。一品にし。文殊櫻 同所にあり。普賢象に對しての。一

室 鐘樓の後にあり。門に一の室と書せし額を掲ぐ。今は荒廢せり。瀧庵和尚の鎌倉記行にも、「いこの室といへるは、實が軒端かたぶきて、めぐりの房々もひえわたりて、人のあとなひもせず。思へば寂寥無人聲のとほそをとぞ、座禪觀法の床をしめたるに似たり」とありて、早く寶永の頃も、荒れたる御思ふべし。

阿彌陀院 本堂より左山の傍にあり。稱 一二王門 櫻門の左右に安置する所の、金剛密迹の像は、運慶の作なりといふ。此二像は名寺の事をつかさどり。杉田村東禪寺といふより、こゝに遷すと云ふ。當寺舊の二王尊は、六浦の荒井

平次郎光吉出家して、日荷上人と號せしが、上人或日稱名寺の住侶と書て圖み二王を贈とす。終に日荷上人勝らたりければ、當寺の二王の像を得て、身延山に遷されたりとて、六浦上行寺に、其二王の像の玉眼なりと稱する五寸あまりの玉を傳へたり。

熊野新宮 池の西阿の上にあり。當寺の鑑守たり。

寺寶佛舍利 八祖相承の舍利と號して代々に傳ふ。弘法大師大和國室生山に納め置き給。彌勒佛泥塑像 長三寸、坐像にして、ひしを、龜山帝の勅により當寺へ移し納るといへり。昔は勅封ありしとなり。

愛染明王金銅像 龜山帝の御念持佛にして、吉備丸の作なりと云傳ふ。請雨經瑜伽論 共に普承相の眞跡の瑜伽論は、長二寸五分一行に二十五字あり。此論は一部百卷たり。しかるを十卷に書きつとめらる。餘は鎌倉の極樂寺に三卷、同在柄天神に二卷、紀州高野の金剛三昧院に一卷、江州竹生島に一卷、以上合せて八卷は、今尚存すといへども、其餘の二卷は、所在しれざるよし、鎌倉志にみえたり。其外古佛多く枚舉するに遑あらず。

大界外相圖 元亨三年、當寺結果の圖なり。其光景尤も大窟高堂にし。て古の繁昌いちじるく今に異なり。其畫書の按に云ふ。

元亨三年癸亥二月廿四日

羯摩師極樂寺長老忍公大德

答法 多寶寺長老俊海律師

唱相 湛睿

當寺本願越後守實時 およ 及び顯時貞時貞將等の畫像の懸幅あり。

楊貴妃玉簾一連 初め尾州織田にありしを、龜山帝の勅により、當寺に收。とぞ。硝子の細き字を色紙もてあみたるものなり。

梅花無盡藏曰

金澤稱名律寺間西湖梅以未開爲遺恨矣珠簾猫兒支竺群書之目錄無介者而不能融目云云

注曰稱名寺水晶簾唐猫見之孫一大時教反郡書蓋先代貯焉又曰寺祕件々之物容易元使人看之也

回國雜記

簾の長さ三尺四寸、ひろさは四尺ばかりにて、水精の細さ

世の常の簾よりも猶ほそく、形はみえはべらず。玉妃の其

いにしへに、九花帳に懸はべりけん事など思ひやりはべれ

ば、千古の感緒今更膽に銘じて、皆人袖を濡しはべりき。

遠き世のかたみを残す玉簾思ひもかけぬ袖の露かな

道興准后

北條陸奥守制札

金澤阿彌陀堂稱名寺領敷地并垣場等之事

右於當所軍勢并甲乙人等不可致濫妨狼籍若於令違犯輩者爲被處罪科可被注申交名之狀依仰執達如件

康安二年五月廿四日

陸奥守

永享十一年稱名寺領結解狀

註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解狀事

合八十貫文内

六十九貫六百分

寺納

八貫文

代官給

一貫文

德妙衣料

八百文

夫領路錢兩度四人分  
年貢運上時

三百文

三百文

已上八十貫文

右所勘定狀如件

永享十一年三月三日

政所憲意判

當寺は北條家繁昌の昔魏々たる巨藍なりしかども、物換り星移り堂宇多く破壊して、今は山圍み古木聳えて、松杉梢をあらそひ、常に鬱々たり。房宇ひえわたたりて、寂寞の扉を閉ぢ、座禪觀法の床をしめたるに似たり。

金澤文庫舊址 阿彌陀院の後の畠をいふ。東野文集に、寺前の土庫 相傳ふ、北條越後守平 顯時營建

する所にして、内に和漢の羣書を納め、儒書には墨印、佛書には朱印を用ゆ。印文は楷字にして、豎に金澤文庫の四字を注す。印章の模形は、後上杉安房守憲實執事たりし時、再興せしかども、其後は荒廢して、書籍散失せりとなり。丙辰記行に、越後守平貞顯此所にて、清原の教隆に群書治要を讀ませける。余が見侍りしも文選、清原の師光が左傳、教隆が群書治

要、齊民要術、律令義解、本朝文粹、續本朝文粹、續日本紀などのたぐひ、其外人家に所々ありけるも、一部とものみたるはまれなり。切經も取はごして、わづかのこりて、今に金澤にありと云々。東見記に云く、金澤文庫内に、左傳の卷本三十卷中原師光が跋ありとあり。鎌倉志に、一切經の切残りたるもの彌勒堂にありと云よ。

印面大サ 共如圖

# 金澤文庫

鎌倉大草紙に云く、武州金澤の學校は北條九代の繁昌の昔、學問ありし舊蹟なり。是を今度彼文庫を再建して、種々書籍を入置き、又上州は上杉が分國なりければ、足利は京並に鎌倉御名字の地にて他に異なりと。彼足利の學校を建立して、種々の文書を異國より求め納ける。此足利の學校は、上代承和六年に、小野篁上野の國司たりし時、建立の所、同九年、篁陸奥守になりて下向の時、此所に學校を建ける由、其舊跡に今残りけるを、應仁元年、長尾景久が沙汰として、政所より今の所に移して建立しける。近代の開山は快元と申す禪僧なり。今度安房守公方御名字掛の地なればとて、學領を寄進し、彌書籍を納め學徒を



金澤文庫址  
新所谷



憐愍す。されば此頃は、諸國大に亂れ、學道絶たりしかば、此所日本一所の學校となる。是より猶以て、上杉安房守憲實を、諸國の人もほめざるはなし。西國北國よりも學徒悉く集ると云々。

觀金澤藏書而作

養堂

玉帳修文講武餘

遣人來覓舊藏書

牙籤映日窺蝌斗

縹帙乘晴走蠹魚

圯上一編看不足

鄴侯三萬欲何如

照心古教君家有

收在胸中壓五車

慕景集

二月釋菜金澤の文庫にて行ふよし三好日向守勝元の許より申しこされければ、隣家梅花といふ題を聖供にそへて遣しはべるとして、

春なれや夜々ともがきの近きには遠きも馴る梅の下風

持資

丙辰記行

懐古淚痕驛旅情

府儒早晚起蒼生

人亡書泯幾回歲

境致空留金澤名

御所が谷

阿彌陀院の後の切通を出る畠を云ふ。里俗云く、龜山帝の行宮の跡なりと。切通は參詣の道なりしといへり。

鎌倉志に、此帝勝地佳境へ遊歴の事はあれども、此地へ御幸の事は舊記に見えずと。

兼好法師閑居舊跡

其地今しるべからず。

兼好家集

武藏國金澤といふ所に昔住し家のいたうあれたるにとまりて月あかき夜

古郷の淺茅の庭の露の上に床は草葉とやどる月かな

兼好

藥王寺

三療山と號す。稱名寺の前道より左側にあり。古義の眞言宗にして、龍華寺に屬す。本尊は胎藏界の大日如來にして、坐像三尺ばかりあり。當寺に蒲御曹司範頼卿の靈牌あり、表に大寧寺道悟、裏に天文九年庚子六月十三日と記したるよし、鎌倉志に出るといへども、今その牌ある事なし。

藥師堂

本堂の前方にありて廊をまうく。本尊藥師佛の像、脇士十二神將の木像と共に、行基大士の作にして、深く蒲団に祕安して、みだりに人に拜せしむる事なし。當寺わかしは藥師寺と號す。室木大寧寺是なり。範頼卿没したまひし後、其法號をとつて、藥師寺を大寧寺と改む。故にその頃の住僧、藥師寺の號の變せん事を歎き思ひ、當寺を開創して、藥王寺と名くとす。次の室木大寧寺の條下を合せみるべし。

天然寺

法爾山と號す。同所藥王寺より九丁あまりを隔て、瀬戸街道より野島へ行く道の左側にあり。淨土宗にして、鎌倉の光明寺に屬せり。本尊阿彌陀如來の木佛は、坐像にして一尺五寸ばかりあり。作者しるべからず。開山は然譽禪方和尚と號す。永祿二年二月二日、寺寶に弘法大師、及び惠心僧都等の畫ける佛像四五幅あり。

龍華寺

知足山彌勒院と號す。天然寺より五六丁南の方、瀬戸街道、洲崎村と町屋村の間、道より左側にあり。古義の眞言宗の檀林にして、御室仁和寺の末なり。

本尊大日如來は坐像二尺餘り、右に彌勒佛の木像を安す。共に作者をしらず。左に安置の不動尊は、行基大士の作にして、立像二尺、太田道灌入道寄附すと云ふ。開山は法印融辨と號す。鐘樓、堂の前左の方にあり、其文左の如し。

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺唱鐘知識文  
夫滄海者鱗甲所潛。泰岳者翔蹄所集。則知智池者念塵所浴。靈鐘者苦類所息。然則洪鐘隆鼓焉。非但留吽王之望。劍兼亦赫灰河脫三界苦。得見菩提。  
菩薩勝慧者 乃至盡生死 恆作衆生利  
而不趣涅槃 般若及方便 智度悉加持  
諸法及諸有 一切皆清淨 慾等調世間  
令得淨除故 有頂及惡趣 調伏盡諸有  
如蓮體不染 不爲垢所染 諸慾性亦然



町屋村  
龍華寺





不染利群生 大欲得清淨 大安樂富饒

三界得自在 能作堅固利

卅七尊聰陀羅尼 隨求陀羅尼 光明眞言

各梵字略之

天文十年辛丑五月五日

當寺住法印權大僧都善融

檀那古尾谷中務少輔平重長法名道傳

寺寶 兩界曼荼羅二幅共唐畫にして筆 八祖畫像一幅弘法大師、或は願行の筆なりとも云ひ傳ふ 十三佛續像一幅中將絶の製なり

不動畫像一幅弘法大師の筆なりと云ふ。袈指の裏書に、太田道灌寄進とあり。寺僧云く、天正年間、御當家に於て、重修なし給ひしとなり。

五指量愛染明王像弘法大師の作と云ふ。一握のたけなり。 鈴一箇弘法大師の持物なりといひ傳ふ。 鳳凰頭二箇 龍頭二箇 十箇共蓮慶の作にして、二種とも木を以て製し、上に金の箔を貼せり。

灌頂の時、幡を掛る具なり。

當寺は治承年間、鎌倉右府賴朝公、伊豆國三島明神を、金澤瀬戸の地に勸請なし給ひし後、

法味を進め奉る爲、文覺上人と共に志を合せ、文治年間六連の山中に精舎を創建せられ、

彌勒菩薩の像を安じて都卒の四十九院に準擬し、四方に六八の僧坊を建て、淨願寺と號す。

庄園若干を寄らる。當寺是なり。往昔弘法大師、護摩修行なし給ひし舊跡。然りしより殿堂を竝べ、粉壁は

月の光を移す。伽藍は博做にして、丹柱は星の林をなせり。其後正嘉年間、南都の恩性律師、

當山に住し、戒律を弘め、弘長二年には、東寺の能禪法印當寺に於て灌頂を修行せらる。印

融僧都の附屬に依て、光徳寺を兼帶せらる。此寺も賴朝公の建立にして、眞言の靈區に上りて、高野山無量

に數度の兵亂に依て、兩院の領地も他に奪れ、大に荒廢せしを、明應八年、融辨師大永四年甲申八月朔日

兼、八十二歳。深く是を愁へ、本尊の冥助を願はれしに、菅原朝臣中務丞資方を合せ、伽藍再興

を企んとす。時に本尊彌勒大士夢中辨師に告げ給はく、是より良に當て、末世有縁の勝區

あり、彼所に移して三密の法燈を挑ぐべし、と夢覺て後其所を窺はるゝに、龍燈の奇瑞あり。

洲崎村の境なり。わかしは歌前に歌園の松あり。龍燈の松と號す。今は枯れたり。竟に辨師本尊の靈示に任せ、此地に至り、二町四方に結界し、

兼帶する所の淨願寺光徳寺、兩院の僧坊を、合せて一寺となし、後土御門院の勅を奉り

浦の郷



鎌倉記行

於夕下浪

舟

鳥帽子

沖より

あき

舟

降菴和尚



て、智足山龍華寺と號す。師資相傳の本尊聖教を納めて、善融法印に附屬す。此師は相州小田原の城主大森氏の末子にして、

龍王九と號く。辨師の德行を慕ひ、淨願寺に入て僧となる。其譽世に隆れなし。依て北條左京大夫、永樂録七貫文並柴村權現堂山を寄附せらる。享祿五年に東寺の寶善提院亮惠僧正を

請じて傳法灌頂を受け、天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越として、洪鐘を改鑄す。

其後太田道灌不動尊の靈像を寄附して、武運延長を祈り、此不動尊の像は、本尊の左に安ず。靈牌を置き來世の追

福を求らる。天正十九年、御開國の後、當寺を御修營ありて、御朱印を下し給ひしより、四海

泰平の祈念怠る事なし。

當寺は眞言古義檀林一宗の本寺にして、金澤に甲たり。境内には古木聳え、覺樹の粧ひを示

し、緑竹翠の色をなして、實相不變の容を顯す。海水左右に湛て、朝烏夕兔の影を浮べ、

人家前後に列して山市漁村の觀をなせり。二十有餘の末寺は、林邑に散在して、年々の法會、

月々の勤修、恒例に任せて怠る事なく、寶祚の長久、武運の萬歳を祈り奉る。曉の振鈴の

聲は、無明煩惱の眠を覺し、夕の梵鐘のひびきは、三途の迷夢を破る。實に江南の一精舎た

り。

善應寺

野島山と號す。同所より半道ばかり鹽濱を隔て、南の方野島に傍てあり。眞言古

義にして龍華寺に屬す。本尊不動明王の像は作者をしらす。正觀音の木像は、立像二尺ば

かりありて、聖德太子の作なり。愛染明王は坐像一尺五寸ばかりありて、弘法大師の作と云

ふ。此像の胎中に、愛染尊の小像千體を作り、羅めちるるといへり。

野島

同所東の出崎にして、瀬戸橋へは其間七八丁あり。土人百軒島とも云ふ。民家百軒より

餘る時は、必災ある故に、百軒島と呼べりといふ。此所の出崎に、紀州亞相頼宣卿の鹽風呂の舊地ありといへり。山の出崎に、稻

荷の小祠あり。又中腹には、菅神の宮あり。此地の少し北を平方といひ、町屋村の東を金澤

原といふ。此地の東の海濱を、乙柄の浦と稱せり。

鎌倉記行

宿のあるじ舟もよひして自ら櫓ををし汀をいづるに、秋も

過ぎ行く野島こよなれば、

身の秋を思ひあはせてあはれなり野島の草の冬枯の色 澤 庵

野島渡し のじまのわた 野島より南の方、室木村へ入る渡にして、舟路一丁餘あり。江戸より浦賀への近道なり。

洲崎 すさき 野島の西、瀬戸橋の東の漁村を云ふ。鎌倉志に云ふ、太平記及び鎌倉年中行事等の書に、洲崎とあるは、鎌倉山内の西にある洲崎村の事にして、此地にはあらずと見えたり。

瀬戸 せと 或は追門に作る 洲崎と引越村との間をいふ。

回國雜記

瀬戸金澤といへる勝地のはべるを尋ね行くに、瀬戸の沖に

漁舟あまた見えけるを、

よるべなき身のたぐひかな波あらし瀬戸の汐合渡る舟人 道興准后

磯山傳ひ残りのもみぢ見所おほかりければ

冬されば瀬戸の浦はの湊山幾しほみちて残るもみぢらば 全

瀬戸橋 せとばし 同じ入江に架す。中間に臺を備け、橋杭を用ひずして、長さ二間あまりの橋二つを

渡したり。

慶和尚の鎌倉記行に、追門の明神とて、入海にさし出たる山あり。古木風み麓に橋あり、橋の下より潮さし入りぬれば、遙々遠き山の奥まで湖水となり、潮引きぬれば、水鳥も陸にまよふにこそ、水陸の景氣も朝夕にかはり、金剛も筆をよ

ばざりしと  
なり云々。

照天姫松 てるてのひめのまつ 同所北の方西の出崎にあり。延寶庚申の大風に吹折られたりとして、一株の松の根株

のみを存せり。里諺に云く、照天姫姥の爲に燻られしとて、姥が焼さしの松ともいふとぞ。

鎌倉大草紙に云く、應永三十年癸卯春の頃より、常陸國の住人小栗孫五郎平満重と云者あり

て、謀反を起し鎌倉に背きければ、源持氏結城の城へ動座ありて、同八月二日より小栗を

攻らる。終に小栗忍びて三州へ落行けるとある條下に云く、今度小栗忍びて三州へ落行け

り。其子小次郎ひそかに忍びて、關東にありけるが、相州權現堂と云所へ行けるを、其邊

の強盜共集りたる處に宿をかりければ、主の申すは、此浪人は常州有徳仁の福者の由聞く、

定て隨身の寶あるべし、打殺して取べき由談合す。乍去健なる家人共あり、如何せんと

云ふ、一人の盜賊申すは、酒に毒を入れ吞せ殺せといふ。尤と同じ、宿々の遊女共を集め、今

様など唄はせ、踊舞戯れける。彼小栗を馳走の躰にもてなし酒をすよめける。其夜酌に立

瀬戸橋





ける、照姫と云ふ遊女、此間小栗に逢馴、此ありさまを少し知けるにや、自も此酒を吞ずしてありけるが、小栗をあはれみ、この山を私言ける間、小栗も呑様にもてなし、酒を更に呑ざりけり。家人共は知らず、何れも酔伏てけり。小栗は假初に出る體にて、林の有る間へ出て見ければ、林の内に鹿毛なる馬を繋ぎて置けり。此馬は盗人共海道中へ出で、大名往來の馬を盗み來けれども、第一のあら馬にて、人をも馬をも喰踏ければ、盗人共不叶して、林の内に繋置けり。小栗是を見て密に立歸り、財寶少く取持て、彼馬に乗り、鞭をすよめ落行ける。小栗は無双の馬乘にて、片時の間に藤澤の道場へ馳行き、上人を頼ければ、上人あはれみ侍衆二人付て、三州へ送られ、彼毒酒を吞ける家人并に遊女少々酔伏けるを、川水へ流し沈め、財寶をも尋取り、小栗をも尋けれどもなかりける。盗人共は其夜に分散す。酌に立ける照姫は、酔たる體にもてなし臥けれども、本より酒を吞ざりければ、水に流れ行き、川下よりはひ上りたすかりける。其後永亨の頃、小栗三州より來りて、彼遊女を尋出し、種々の寶を與へ、盗人共を尋ね、皆誅罰しけり。其後は三州に代々居住すといへり。

鎌倉大草紙によりて考ふるに、照天姫は照姫の事を云ふ歟。小栗の名を、世に兼氏と稱すれども、同書小次郎とのみありて、兼氏と云ふ事をしらず。鎌倉志に云ふ、「小栗系譜を考ふるに、孫五郎平満重其子助重とあり、もしくは此小次郎の事ならん歟」とあり。大草紙に出る所、俗傳に異なりといへども、尤も證とすべし。今世に云ひ傳ふる所は、此事より出て附會の説を備けたりしなるべし。

瀬戸明神社

瀬戸橋より一丁ばかり西の方、道より右側にあり。祭神大山祇命一座なり。

神主千葉氏奉祀す。社傳に云く、當社は右大將頼朝公、治承四年四月八日、豆州三島の御神

を勸請なし給ふとなり。鎌倉年中行事には、四月八日瀬戸三島大明神臨時の祭禮とあり。

或は云ふ、往古此神此地へ飛來り給ふとも、土人傳へ云ふ、今金龍院の窟中、飛石

按ずるに、頼朝御鎌倉へ入り給ふは、治承四年十月六日なる事、東鑑に見えたり。此年四月は豆州の配所、北條の館に居はしむなり。社司の傳説、尤も不審少からずとす。小田原北條家の分限帳に、六浦社領久良岐郡六浦に伏す、神主拘とあり。六浦社領とあるは當社の事をいふなるべし。

看督長像 安阿彌の作と云ふ。今本社幣殿の内、左右に置きたり。近世里人粧飾を加へしに依つて、古色をうしなへり。

額

内陣に掲る

正一位大  
山精神官

世尊寺從二位經尹卿筆



法身妙應本無方  
三島不阻一封疆  
山色涵波頭無跡  
朝陽出海是和光  
沢庵

瀬戸明神社





同額裏書曰

延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之

沙彌寂尹

鳥居額 しんどうのをさしやうにあらはすへかきやうのふで 瀬戸明神 神道長正二位卜部季兼卿筆

鐘樓 しほろう 社前右の方にあり。銘文左のごとし。

瀬戸三島社鐘銘

洪鐘新製。寄器海壖。靈神振德。衆人結緣。韻徹遠近。鎔體黃玄。緇素益大。村里聽鮮。開靜動閑。奏敬悲田。驟化世俗。頻敲夜禪。覺煩惑夢。驚生死眠。昏曉清響。劫々永傳。

大戒菩提薩埵僧普川筆 普川國師は鎌倉戒寺の第二世を襲

應安七年四月十五日奉鑄之

神主

檀那沙彌釋阿井十方四衆等

勸進聖 義道

大工 大和權守國盛

藥師堂 やくしだう 本社の右にあり。土人放下僧藥師と稱す。

按ずるに、放下僧は下野國住人、牧野左衛門何某が子にて、其節を小次郎といふ。父左衛門上州伊香保の湯に浴せし頃、相模國の住人刀彌正信俊といへる者と口論し、信俊に討れたり。兄弟の繁親の歌を討たんと、放下に身をやつし、此瀬戸の三島明神の社前にして、信俊にめぐり逢ひ、終に親の仇を報いぬるよし、放下僧と號する謠曲にありといへども、他の書に見あたらず。

三本杉 さんぼんすぎ 藥師堂の前にありて、根株相連りて、三本ならび生ぜしも、延寶庚申の大風は、吹折られたりとて今はなし。

蛇混柏 じやひやくしん 本社右の傍にあり。是も延寶八年庚申八月六日の暴風は、吹き倒されたりとて、今地上に横たはりてあり。其樹長大にして、龍蛇の起伏するが如し。金澤八木と稱するものゝ其一なり。

梅花無盡藏曰

文明龍集丙午十有八年小春二十有七己亥。盤桓瀬戸六浦之濱。遺廟之前。掛昔時諸老所作之詩杉。邊傍點劃不眠。如新鑄之。云云

同書曰

瀬戸社 自注云。六浦廟前。有古柏屈蟠。

遺廟柏園六浦橋 朗吟繫馬石支腰

歸鴉飛破翠屏面 剩被風聲添晚潮

鎌倉記行

迫門の明神へまうでけるに、是は三島の大明神、本地は大  
通智勝佛、伊豆と御一體なりと、神職こたへられける。

まうでつる昔を今に思ひ、いづの三島もおなじ神垣の内 澤 菴

當社境内は、千歳の古木雲を凌ぎ、回岩社頭をつよみたる山の勢ひ、實に巨靈神の手を延て、  
いづくよりか此山を遷しけんとかやしむばかりなり。社前の老樹浦風に靡き、打寄る浪は下  
枝を洗ふ。一根清浄なる時は、六根共に清く、我人の頭に神もやどらざらめやと、いと尊く  
ぞ思はれける。

瀬戸辨財天 同社前の道を隔て、南の入海へ築出したる小島にあり。昔頼朝卿の御臺所平



瀬戸  
辨財天

金龍院  
飛石



の政子御前、江州竹生島の御神を、勸請せられけるとあり。島の中、混柏を多く植たり。今は枯れて其形甚奇なり。同橋の下に、福石と唱ふるものあり。金澤四石と稱するもの一にして、土人の話に、この石の前にて、ものを拾ひ得る事あれば、必ず有福の身となると云傳ふ。

鎌倉記行

社の前は島をつき出して、辨才天を勸請し、島へは第一第二の橋あり。島のめぐり古木浦風になびき、よる浪しづ枝をあらふ。

波風も心もなぎぬ大海をさながら神のひろまへに見て 澤 菴

圓通寺 日輪山と號す。同所二丁半ばかり西の方、道より右にあり。昔法相宗にして、南都

法隆寺に屬す。今は天台宗に改りて、江戸の東叡山に屬せり。本尊は元三大師を安置す。開山は法慧法印と號す。久世大和侯源廣之寺領を附せらる。

東照大権現宮 山の上に銅座なし奉る。郡官柳木氏の御請なりといふ。

昇天山金龍院 同所西南の方、四丁餘を隔て、同じ道の左側の海岸にあり。世俗飛石山と

も呼べり。禪宗にして、鎌倉の建長寺に屬せり。本尊正觀音座像二尺三寸、行基大士の作

なり。鎌倉志に、虚空藏菩薩を、本尊とすといへどもしからず。方崖元圭和尚をもつて開山とす。和尙は儉約翁の法嗣なり。永徳三年九月十六日に寂す。

飛石 當寺後園の山の半腹にありて、高さ一丈あまり、廣さ九尺ばかりの巨巖にして、昔瀬戸の三島明神、豆州より此石上に飛移り給ふ、と云傳へたり。されど近頃の地震に震落して、平地に轉びてあり。

九覽亭跡 同じ山の上のあり、曲折して登る。いかなる人の備けたりし亭の跡なるや詳ならず。此所の眺望も又多景なり。寺僧云ふ、此地の八景に能見堂を加へて、見るこころにて名づけたりとなり。

泥牛庵 金龍院の前路を隔て、向側にあり。禪宗にして鎌倉圓覺寺に屬す。本尊は七寸ばかり

の唐佛の十一面觀音の像を安す。此庵の開祖は、圓覺寺の傳宗庵南山和尚、諱は土雲聖一禪師の嗣法なり。建武三年十月七日寂、崇壽寺の開山なり。中興は習甫玄道座原と號す。承應中、當庵の南一町ばかり、山の上に古墳二基あり。

其一は海老名長門守といへる人の墓にして、此人泥牛菴にて自害し終れり、と云傳ふるのみにて、時世事實ともに精からず。猶考ふべし。按ずるに、海老名源三、季貞が後裔なるべし。

荒井妙法日荷上人加持水 同所農家金子氏の地に、存する井を云ふ。その味甘美にして、

尤も靈泉たり。此所の小地名を荒井と稱するは、往古日荷上人荒井平次郎光吉と號して、

此地に居住せしによりて、かく呼來るとなり。猶上人の事跡は、次の上行寺の條下に詳なり。  
能仁寺舊跡 今の米倉裏の陣屋の地なりといふ。此寺は昔上杉憲方明月院道合の建立なりしといへり。

鎌倉志古記曰

上杉房州太守。築武州金澤能仁寺。創七字伽藍。請方崖和尚爲開山第一世。號山曰福壽。號寺曰能仁。太守有旨。陞能仁寺位。列諸山者也。永德三年小春。日東暉曇听。謹記。又本尊建立永德二年三月七日始之。同年四月廿一日終。住持東暉曇听奉行。德慧、德澤、檀那巨喜上總州。法眼朝榮作之。大檀那房州道合德珠書之。

能仁寺佛殿梁牌銘 鎌倉建長寺の觀音庵にあり。其文左のごとし。

恭願皇圖鞏固而四海昇平。黎庶安寧而五穀豐稔。檀那前房州太守菩薩戒弟子道合敬白。庄伏冀佛運帝運歷永劫而綿延。寺門檀門經萬年以昌盛。岩永德二年壬戌四月日。開山方崖元圭。謹題右。

六浦山上行寺

泥牛庵より六七町西南の方、道より右側にあり。當寺往古は眞言の古刹にして、六浦山金全寺と號す。然るに應安年中の住持某、日蓮の法を尊み、日蓮宗となり、北總中山の日祐上人開祖とし、自ら妙法日荷上人と號す。日祐上人は、千葉宗胤の孫、貞胤の子にして、祖師堂。宗祖日蓮大士の像を安ず。座像二尺三寸余あり。法華經讀誦のさまなり。日法上人三十

祖師木像胎中收藏法華經書寫人名簿 紙は薄用の如くなる質にして、そのたけ三寸三分ばかりの巻紙へ、細字に書きたるものにて、表紙もなく巻きたるまくを紙にて包み、紫銅の經筒に入れて、胎中に收む。經筒は明和年間製のものなり。法華經八卷に、書寫の人名簿一卷共に九卷あり。其文に云はく、

御身の御經奉書寫之人々

- 一 卷 圓融律師 日源 安立坊の開山
- 二 卷 良範坊 日秀
- 三 卷 正圓坊 日正
- 四 卷 祐奠坊 日傳
- 五 卷 良範坊 日秀



六浦  
上行寺



六卷

乘寧阿

兩人

理賢

七卷

乘寧阿

日宣

八卷

理賢坊

日理

右願主 卿公沙門

奉造立

妙光慈母

妙法親父

奉讀誦妙法蓮華經五部

良範

上總公

正圓

一府同心久讀

方便品

壽量品

陀羅尼品

普賢咒

十如是

自我偈

奉各十篇宛讀誦之

奉讀誦

十如是

自我偈

題目百廿反

奉唱題目一萬反

日源敬白

御身ノ形相中老日法上人御作也

應永十三年丙戌十月十三日

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者爾住迹用本名字初隨有喜

形相身任御附屬妙法之要五字弘一天四海祕法良藥施萬人明

廣爰流布因撰純就信心大施主等之成就所嚴迷者也

釋迦堂釋迦堂の右に頭。其間に廟を備たり。本尊釋迦多寶四菩薩當寺往昔眞言宗たりし時の、五智の如來の像なりしといへり。

六浦妙法日荷上人石塔祖師堂と釋迦堂との間、櫃のもとにあり。高さ一丈ばかり、中腹の石のみ往古のまゝにして、上下とも、後人造り添へたるものとあはし、中腹の石の横面に、文和二年六月十三日と彫付てあり。妙法は當時

の大檀那にして、宗門に於てなまき妙門なり。妙法俗稱を荒井平次郎光吉と號す。建長六年甲寅日蓮大士北總中山に遊び、後相州鎌倉へ歸らんとし給ふの日、富木常忍と同船して、此六浦に著岸あり。其頃此妙法上人未だ荒井平次郎光吉と稱したりしが、日蓮大士の化道を尋み、上足の日蓮上人に隨從し、出家得度の後、妙法と號す。文和二年癸巳六月十三日示寂す、依て日蓮上人と稱す。肖像は中山法華寺にあり。又妙法の住たりし舊跡は、今の金龍院と米倉家陣屋の間、いさゝかの地を荒井と呼ぶ。前の日蓮上人加持水の條下に詳なり。又云ふ、江戸谷中延壽寺の記に、妙法禪門日蓮上人は、六浦荒井の城主播磨守と號くるとあれども、城主といふ事考へず。或は此妙法は杉田如法と號けて、北條時頼の臣なりと云ふ、しかれども時頼逝する年歴を以て考ふるに、まことなる時代かなひがたし。

**寶篋印塔** 祖師堂の前、左の方の山の裾にありて、高さ一丈二尺あまりあり。塔の正面には、梵字を刻し、横面には文治元年の年號を刻せり。當寺往古眞言宗なりし證なり。

按ずるに、米倉家陣屋の上より、上行寺の後の山嶺は、地足山龍華寺の舊地なりしと云ふ。今も上行寺の後の田の上、畑道の號に花藏院と號ぐるものあるは、昔龍華寺の支院、花藏院の門前にありし橋なる故に、しか號くと云ふ。

**鎌倉志**に、當寺什寶に位牌一枚あり。日蓮上人の筆の曼陀羅を彫り、其下に日蓮上人一世の間、引導せし人々の法號俗名を擧て、應安三年と記せり。又日蓮上人の大曼陀羅、及び日蓮大士の消息等を存する由、記されたれども、今當寺に傳へずと云ふ。

**金剛山嶺松寺** 同所三丁ばかりを隔て、西南の方、道より右側にあり。禪宗にして建長寺龍峯庵に屬す。本尊に釋迦如來の木像を安置せり。開山は月窓和尚と號す。諱は元曉、紀州の人、貞治元年十一月二日寂す。儉約翁の法嗣なり。傳へ云ふ、當寺は千葉介胤義の建立なりと。鎌倉志に、瀬戸明神の鐘の銘に、神主平胤義とあり。神主は平姓千葉氏なり。此人の建立歟。千葉系圖にも胤義と云ふ有り。

寺建立の事いまだ詳ならずと云々。因に云ふ、千葉家累代の登城は、本堂の後園百歩ばかりを隔て、山の傍にあり。

**六浦** 東鑑六浦六連成、六面に作る。東鑑に、將軍家此地に遊覽の事往々見えたり。又同書に、建久三年壬子二月廿四日丁卯、武藏國六浦海邊において、上總五郎兵衛尉忠光を梟首す。義盛是を奉る云々。又鎌倉大草紙に、應永四年正月廿四日、小山若丸が子ども、二人弱年にてありしを、會津の三浦左京大夫、是を召捕へ鎌倉へ進上しけるを、實檢の後、六浦の海に沈めらるよとあり。北條九代記には、田村庄司則義、小山若丸丸に與して、菅領氏滿に叛ける故に、鎌倉より攻めければ、則義は自害す。其子五歳と七歳になりしを生捕て、六面の沖に沈めにぞかけられけるとありて、少しく異なり。

永祿の頃は、小田原北條此地を領し、六浦木曾分の地は、武田家へ付し、同所大道分の地は、龍源軒といへるに付したる由、分限帳に見えたり。

澤庵和尚 鎌倉記行

あくれば三日鎌倉へ赴くに、一坂を過れば里あり。ことなむむつらの浦かたとへば、夫とこたふ。海士の子どものあそぶを見て、

天璇之部 卷之二



侍杖川  
光傳寺



よついつと六面の浦の海人の子の遊ぶは潮の遠干潟かな 澤庵  
海士のすみかのあはれを見て

浪あらしむつらの浦の海士の小屋かこふとするもまばらなりけり 同

六浦川 此地の道を横ぎりて流るゝ小溝を云ふ。又此溝に架す小橋をも、六浦橋と號くといふ。

専光寺の邊より、光傳寺の邊迄の地の字を、川村と稱ふ。控ずるに、昔の水流の舊跡なる故に、かくは呼ぶなりん歟。

日光山専光寺 嶺松寺より二町ばかりを隔てゝ南の方、道より右側にあり。淨土宗にして、同所天然寺に屬す。本尊十一面觀音は、立像一尺ばかりあり。佛工春日の作なりと云ふ。相傳ふ、照天姫の念持佛にして、姫、松葉にて燻られし時、身代に立たまふ、と云傳へたり。寺の後の方に、日光權現の宮あり、故に山號とす。

油堤 同じ寺の後の田圃を隔てゝ、半町ばかり西の方に續きたる山を、油堤と云ふ由土人云り。鎌倉志には、専光寺のりけん、里諺にいふ、照天姫の乳母侍従といへるもの、姫の粧具を携へ、此所

迄尋ね來りしかども、姫の行方しれざるを歎き悲み、彼粧具を捨て、終に此所の川へ、身を沈めたりし故に號とすとなり。

侍従川 川村と大間村との中間、光傳寺の前を、流るゝ川の下流をいふ。水源は鎌倉より發し、末は三艘村より鹽濱へ出て海灣に會す。瀬戸街道へ横ぎりて架す橋を、侍従橋と號く。名義は油堤の條下に云ふが如し。此橋を渡りて右の道は武藏相模の國境、地蔵の辻へ出て、鎌倉へ往還の道なり。南行の道は三浦三崎への通路なり。左の川傍の道は、三艘浦又相州境浦郷等への道なり。

常見山光傳寺 同所北の端、道より右側侍従川に傍てあり。淨土宗にして鎌倉光明寺に屬す。本尊阿彌陀如來の木像は、立像にして四尺ばかりあり。作者しるべからず。開山は得蓮社忍譽靈傳上人と號す。門の内右の方に地藏堂あり。本尊地藏菩薩は、立像六尺ばかりありて、運慶の作なりと云ふ。地福山藏光寺と號す。

界地藏 土俗鼻缺地藏と稱ふ。光傳寺より九丁あまり西の方、鎌倉道の傍にあり。巨巖の

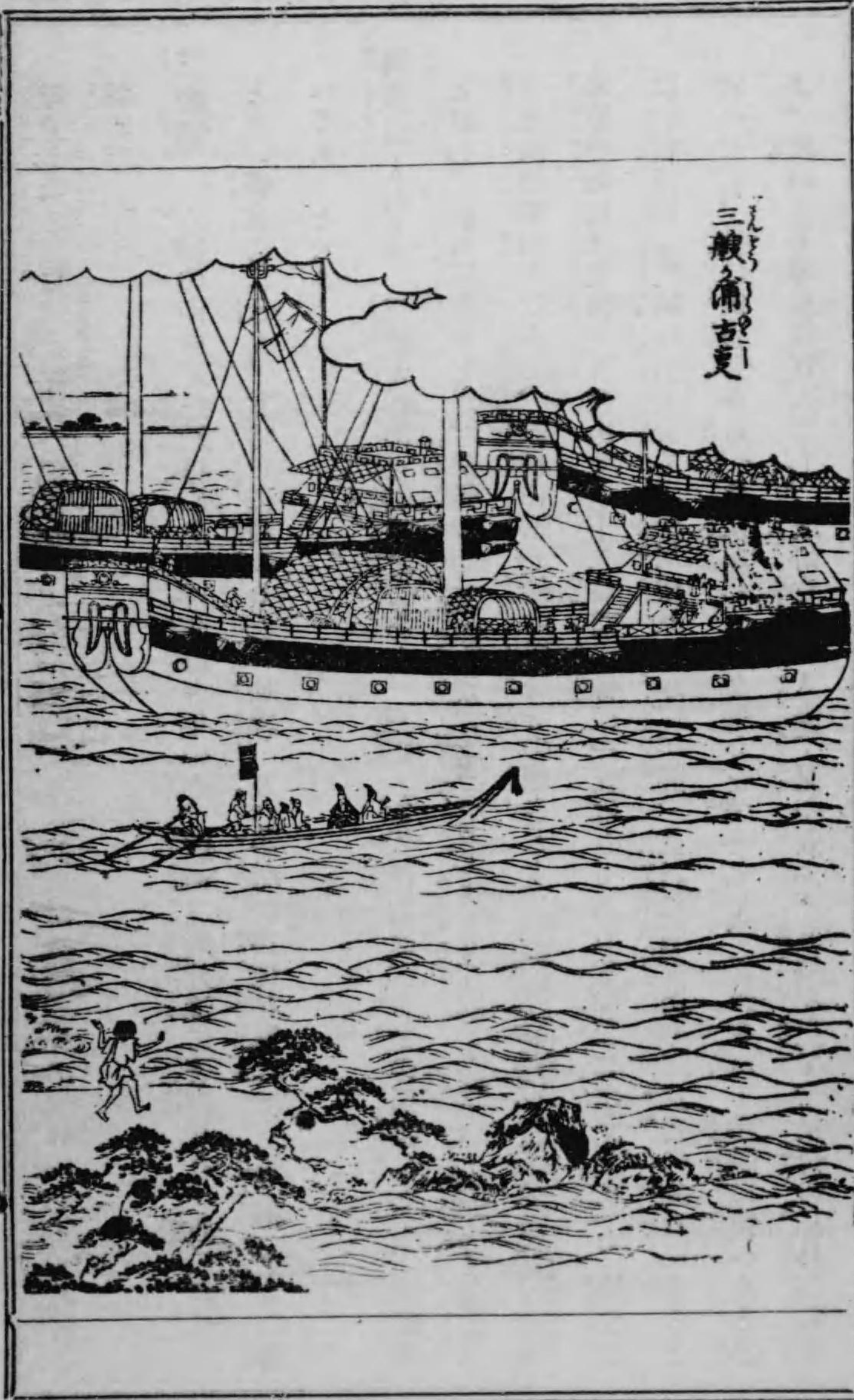
真跡地藏



壁立したる所に、此尊像を鑄出せり。尊像の真跡損す。故に真跡地藏と云ふ。此所は武藏相模の國界にして、峠村と號く。

三艘浦 六浦の南向、三艘村にあり。永祿九年の春、唐船三艘此浦に著岸せり。故に名付くとぞ。鎌倉志に云く、其時舟に載來りし一切經、及び青磁の香爐花瓶等は、皆稱名寺に傳へてありと云ふ。

海藏山太寧寺 三艘が浦の東瀬崎村にあり。界地藏より二丁ばかりあり。往古は、布金の道場にして、藥師寺と號し、眞言宗なりしが、蒲御曹司源範賴公生害ありし後、其法號を採て、太寧寺と號す。千光國師開山となりて、禪林に轉じ鎌倉建長寺の屬寺とす。藥師寺の號の變せん事を歎き、其頃寺前村の地へ藥王寺を開創す。前の藥王寺の下に詳なり。本尊藥師如來立像丈五尺あり。十二神將の像は三尺ばかりありて、共に運慶の作なり。鎌倉志に、當寺勸進帳を引て云く、往古、伏見帝永仁年間、此村に貧女あり、父母の忌日に當るといへども、佛に供養し奉るべき便なし。絲を繰り卷子として、これを賣て佛餉に備へんと思ふ。然れども容易に買人なし。或時童子一人來て是を買ふ。其價を以て、父母の忌日の供養



三艘浦古吏

の料に充つ。しかして佛前に至るに、件のへそ多くあり。依て知ぬ。如來貧女が純孝の志を感じて、自爾以來、へそ薬師と云とあり。此故に、今も此薬師佛へ、宿願の事ある時、其所願成就に  
蒲冠者範頼靈牌 堂中に置けり。其牌面に、太寧寺殿道悟大禪定門  
のりよりの 本堂の後の山腹にあり。高さ二尺六七寸ばかり  
範頼墓 りの五輪の石塔なり。臺石は土中に埋む。

按ずるに、異本源平盛衰記に、範頼伊豆の修善寺にまし／＼けるを、景時又、頼朝に申して伊豆に越し、景時父子三人五百餘騎にて、修善寺に押寄せ。範頼は或坊に、小袖に大口ばかりにておはしけるが、差詰引詰散々に射給ひける。寄手多く射殺さる。其後矢種盡きたれば、坊に火をかけ自害してぞ失せられける。其後景時煙を掃め、範頼の燧首取りて、鎌倉に持ちて行き、頼朝に見せたてまつるとあり。鎌倉志に云く、其級を此地に葬りしが未詳とあり。

題太寧寺六首

絶海

寺樓一抹晚江煙 朝送鐘聲落釣船 老矣身心機事外  
 間鷗容我社中眠 殘曉香消柏子煙 老來無夢趁漁船 聞君去借江村宿  
 一夜鷗邊看月眠 六浦遙連三浦煙 趁風隨岸幾移船 興來撐棹竊佳處

月落前灣猶未眠 雪後蘆花月滿船 盖世功名身外事  
 山脚夕日水籠煙 幾人能得一菴眠 還愛華亭載月船 晚興遲留江上寺  
 衲衣懶惹御爐煙 三山翠映白頭眠 功名盖世畫凌煙 失墜危於滄浪船 一錫歸來楓外寺  
 白沙翠竹閉門眠 當寺書院は北に向ふ。瀬戸の入海を眼下に臨で、風光殊に勝れたり。寺寶に、範頼自筆の古歌の懸幅、及び陣中用られたりと云ふ長刀一振あり。  
 宮根權現社 瀬崎の東、室木村にあり。又民家の間に、犬樟の老樹あり。  
 雀が浦 同所の南の出崎をいふ。菅神の小祠あり。故に土人は天神崎とも稱す。此地の海灣を浦の江と云ふ。

雀ヶ浦



巾著巖 同所絶壁の下にありて、大き二間四方ばかりの盤石なり。潮盛きたる時は形全くあらはる。形によりて土人かりそめにまうけたる名なり。

根附巖 同所百歩ばかりを隔て、西南の方の崖下にあるをさして、しか名づく。大き六尺あまりの巖なり。潮盛る時はみえず。これも前の巾著岩に比しての名なり。

榎戸湊 刀切村の南の入海を云ふ。

回國雜記

浦川の湊といへる所に至る。こゝは昔頼朝卿の鎌倉に住せ給

ふ時、金澤、榎戸、浦川とて三つの湊なりけるとかや

榎戸はさよはりてみず浦河に門をならべてみゆるいへく 道興准后

烏帽子島 同所東の出崎の小島をいふ。形状烏帽子に似たる故に名とせり。

鎌倉記行

ゑほし島といふはとはでもしるし

朝夕に浪よせ來ぬる烏帽子嶋沖よりあらし風折やこれ 澤 庵

夏島 同じ東にあり。長三丁餘り横一丁ばかりの小島なり。里人云く、立冬の雪といへども、

積る事なしといへり。

鎌倉記行

夏島は名のみなりけり、時は冬なかば

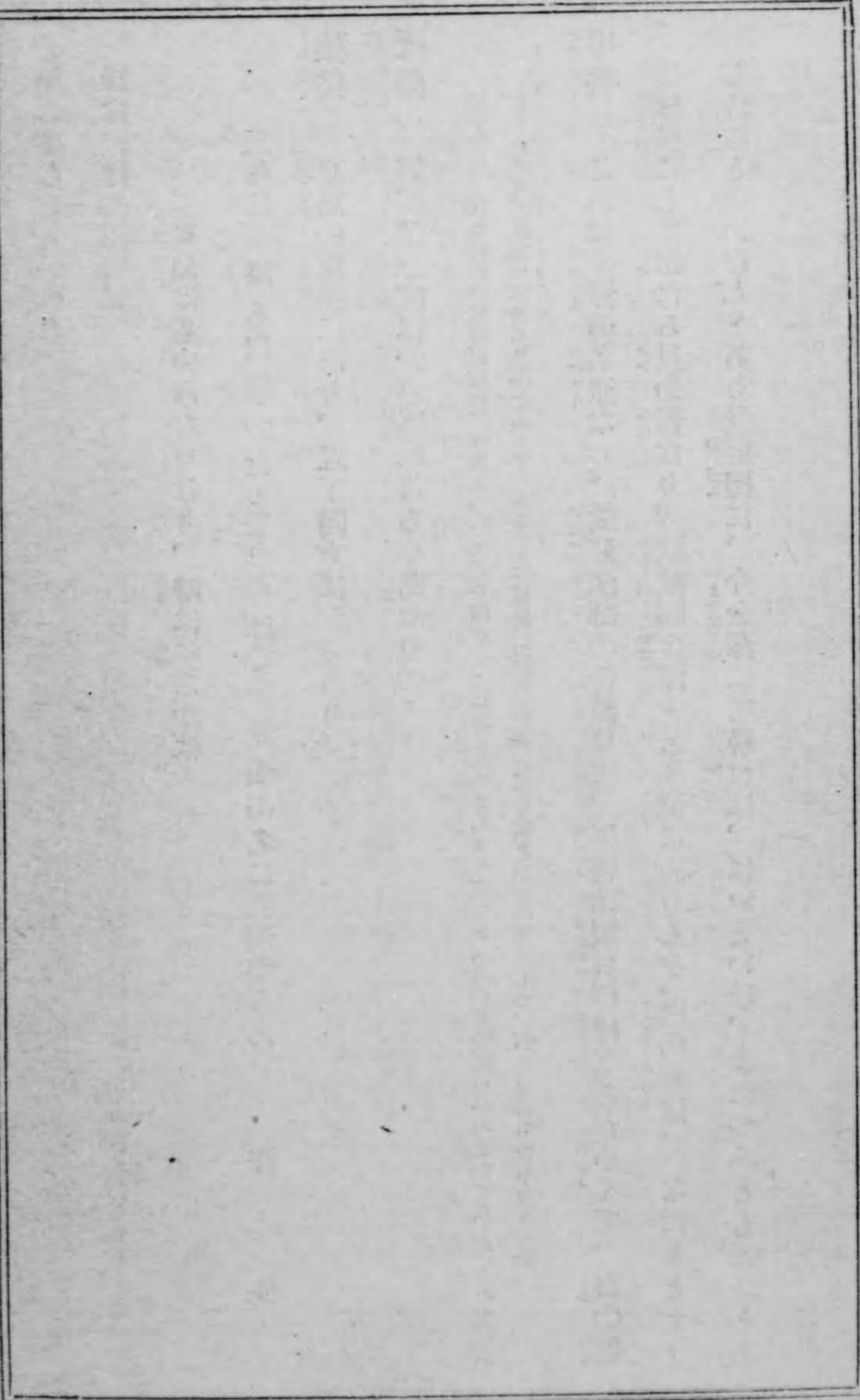
三冬にも降る白雪のたまらぬはこや夏嶋の名にし消ゆらん 澤 庵

猿島 夏島の東南にあり、五丁四方ばかりあり。

裸島 同所二三町ばかり離れたる小島なり。

按ずるに、澤庵和尚の鎌倉記行に、笠島といへる名を擧げて、其詠に「かさしまや来てとふ里の夕時雨ぬれぬ宿かす人しありやと」かくあれども、此地に笠島ある事をしらず。恐らくは猿島、裸島、二島の中を聞きたがへなどして、かくはいひたるならん歟。

甲香 これは金澤の名産なり。兼好法師の徒然草に、甲香は螺貝の様なるが小くて、口の程の細長にして出たる貝の蓋なり。武藏國金澤と云ふ浦にありしを、所の者は、へなたりとまうし侍るとぞいひしとあり。野槌に、今金澤にて尋れば、ばいといひ、またつふとも云ふとあり。



大正十一年九月十五日印刷  
大正十一年九月十八日發行

不許複製

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼  
發行者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷部

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地



終

